（別紙　２）

論文審査の結果の要旨

氏名　　市橋　明典

20 世紀フランス文学を代表する作家ジョルジュ・バタイユは、一個の体系に固定しがたい独自の思索を展開した。しかし、その多様な執筆活動の核に「聖なるもの」、バタイユの用語では「至高性」をめぐる考察があったことは間違いない。その意味で、神なき世界における神秘体験をめぐって書かかれた『内的体験』(43)は、バタイユ思想を読み解く鍵と言ってもいいだろう。

本論文「「ポエジー」或いは現代における交感の不可能性――『内的体験』におけるジョルジュ・バタイユの「詩的表象」について――」は、断章で書かれたこの難解な書物に焦点を当て、近代批判と供犠的表象という視点から、その核心となる思想を詳細に検討したものである。孤独に切り離された存在同士のあいだで、どのようにして「交感」は可能となるのか？　現代において、「聖なるもの」はいかにして可能なのか？　こうした根源的な問いに、バタイユが『内的体験』においていかに答えようとしたかを明らかにすることが本論文の狙いである。全体は四部から構成され、『内的体験』にいたるまでのバタイユの執筆活動（第一部と第二部）、『内的体験』の分析（第三部）、『内的体験』が近代においてもつ意義（第四部）が論じられている。

『内的体験』の前史では、論者はコジェーヴの講義を通したヘーゲル体験の重要性を強調し（第一部）、同時にシュルレアリスムとの出会いと訣別を通して、バタイユが具体的にどのような文学世界を目指したかを詳細に追求した（第二部）。『内的体験』の分析では、バタイユの「ポエジー」が、全一者となろうとしながら、結局は死の不安と恍惚に身をゆだねざるを得ないという、近代における個人のあり方を「演劇的」に表象するものであるという見方を提示、バタイユがそのプロセスを「過剰」「消尽」「供犠」といった概念によって究明していることを詳細に検討した。『内的体験』そのものについては膨大な先行研究があるが、そのエクリチュールの核心に「ポエジー」という概念を見出し、近代における思想史的意義を問う研究は緒についたばかりである。論者はそれらの研究を十分に咀嚼したうえで、「ポエジー」の実践を通して垣間見える「至高性」の意義を多面的かつ総合的に解明した。その上で、バタイユの「ポエジー」が、近代を支配する「モノ化」「道具化」の原理に対立するものであり、そこに思想家としてのバタイユの意義があると指摘する。明晰でありながら、確定された体系とはならないバタイユの思索を検討するうえで、重要な論点が提示されたと言えるだろう。

「ポエジー」が贈与論と深く関わっていることを見落としている点、「表象」というキーワードがキリスト教の文脈のなかで持った意味を看過している点など、十分な分析がなされなかった論点がいくつかある。また、表現の不十分さ、訳語の不適切さなどがあるが、文学、哲学、宗教学、経済学にまたがるバタイユの全活動を、「ポエジー」という視点から包括的に捕らえる可能性を示し、その概念が同時代の思想潮流とどのように関連していたかを明らかにした点で、本論文はきわめて有意義な研究である。さらに、どの章においても、論者の積年の研究成果が発揮され、密度の高い情報が盛り込まれている。以上から、審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断する。